

ZOCALO 2022 6 ▶ 7

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

「幻の画家」の実像を紐解く

企画展「シアトル→パリ 田中保とその時代」
2022年7月16日(土)～10月2日(日)

当館を何度も訪れている方にとって、田中保(1886-1941)の名は馴染み深いものではないでしょうか。岩槻に生まれて18歳でシアトルに渡り、その後一度も日本に帰ることなくパリで客死した画家は、謎の多い生涯も相まって、ある種の伝説化された存在として私たちの興味を刺激してきました。

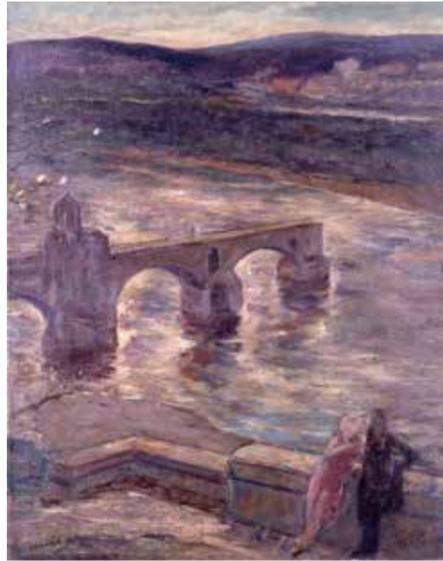
当館では、埼玉ゆかりの作家として調査研究を進め、その成果は1988年の「1920～30年代 ラブソディ・イン・パリ 田中保をめぐる画家たち」、1997年の「画家タナカ・ヤスシ シアトルとパリにかけた夢」などの展覧会として結実しています。田中についてはMOMASコレクションでも頻りに紹介してきましたが、「作品をまとめて見たい」というお声も多くいただいていた。このたびの「シアトル→パリ 田中保とその時代」は、当館では実に25年ぶりの回顧展となります。

展覧会の準備は、埼玉県立博物館(埼玉県立歴史と民俗の博物館の前身)の時代から蓄積されてきた調査資料を整理し、現在の視座からどのような見直しが可能か検討するところから始まりました。画期的だったのは、世界各地で歴史的資料のデジタルアーカイブ化が進んでいたことです。その恩恵を受けて、移動が制限されるコロナ禍の時代においても、当時の新聞記事など一部の海外資料については、日本にいながら閲覧することが可能になりました。また、2022年1月に田中についての著書[註]を出版したデニズ・B・タナカ氏のご協力を得て、田中のアメリカへの入国記録、サンフランシスコの画商に宛てた書簡などの新しい資料を参照することができました。こうした資料からは、これまで明らかにされなかった田中の一面が浮かび上がります。

シアトルで画家としての地位を確立し、1920年にパリに移住した田中は、サロン・ドートンヌなどの展覧会に出品を重ねて評価を高め、肖像画や裸婦像といった分野で自らの芸術を開花させました。パリで名の売れた画家となってからも、田中には故国である日本でこそ認められたいという思いがありました。しかし、日本の美術教育を受けず、アメリカで身を立ててきた田中は、生前に日本の画壇から受け入れられることはありませんでした。国際



1



2



3

化が進み、人の移動がますます活発になった現在、民族や国家とアイデンティティの関係についても再考が促されています。このような観点からも、アメリカとフランスで外国人として活動し、日本の美術界においても「他者」とならざるを得なかった田中の生涯を再検証することは、重要な意味をもつでしょう。

シアトルで出会ったアメリカ人の妻、ルイーズ・ゲブハード・カンの人物像もまた、興味深いものです。ルイーズは文学の道を志していましたが、最初の結婚相手は彼女の夢に理解がなく、離婚に至っています。その後美術評論家として活動していたルイーズの知性に、田中は強く惹かれました。そしてルイーズにとっても、田中は前衛的な芸術動向への関心を共有できる運命の相手と映ったのです。仲を深めた二人は結婚を望むようになりますが、アジア系移民の排斥運動が盛んであった当時のアメリカ社会において、異人種との結婚はスキャンダルといえるものでした。ルイーズは裁判官の前で二人の愛の正当性を陳述し、ようやく結婚の許可を得ましたが、当時の法律に基づいてアメリカ国籍を失いました。困難を乗り越えて

結婚し、画家の良き伴侶として振る舞いながら、旧姓で執筆活動を続けたルイーズの姿は、女性の多様な生き方が問われる現在においても示唆に富むものといえるでしょう。

この展覧会では、当館のコレクションを中心に借用作品を交え、最新の研究成果によって田中の画業を振り返ります。あわせて田中が生活した20世紀初頭のシアトルの状況や、パリで同時期に活躍したエコール・ド・パリの美術家などを紹介し、田中の実像を時代とともに紐解きます。(S.A.)

[註] Denise B. Tanaka, *Intangible: Yasushi Tanaka and Louise G. Cann, A Marriage of Artist and Author*, Sasoriza Books, 2022.

1 田中保《裸婦》1924(大正13)年
2 田中保《サン・ベネゼ橋》1928(昭和3)年頃
3 田中保《猫と花》1920-40(大正9-昭和15)年
すべて埼玉県立近代美術館蔵

さくねんのたまもの 2021年度新収蔵品紹介

ここで、昨年度収蔵した作品をご紹介します。計16作家294点の作品を寄贈いただき、現在、コレクションは4000点を超えることとなりました。改めて寄贈者の皆様に心より御礼申し上げます。

新収蔵作品のうち、孫雅由(1949-2002)については、1970年代後半から2000年までに制作された版画・ドローイング・資料合わせて177点におよぶ作品を寄贈いただきました。早速、MOMASコレクション第1期で特集展示としてご紹介しています。また、孫雅由と併せて郭徳俊(1937-)、文承根(1947-1982)の版画作品もそれぞれ1点寄贈を受けました。



文承根《無題》1977年

先月まで開催していた「開館40周年記念展 扉は開いているか—美術館とコレクション1982-2022」への出品を契機に、寄贈いただくこととなったのは川俣正(1953-)のドローイング作品4点です。これらは、開館間もない時期の企画展「木のかたちとエスプリ」で行われた公開制作《Project Work in Saitama '83》の第一次案として描かれたもので、貴重な収蔵となります。



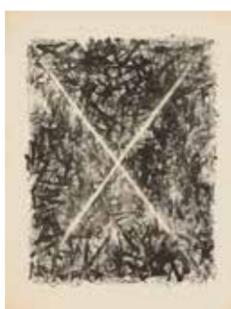
川俣正《「Project Work in Saitama '83」ブランドローイング》1983年

した。当館では、もの派やそれ以降の1970年代美術を特に力を入れて収集しています。これに関連して、吉田克朗(1943-1999)、堀浩哉(1947-)、林芳史(1943-2001)、飯



堀浩哉《鑑賞を拒否する》1969年
再制作 1992年

田昭二(1927-2019)、秋山祐徳太子(1935-2020)の作品資料が加わりました。堀浩哉は、1969年に彦坂尚嘉らと「美共闘(美術家共闘会議)」を結成、71年には「第一次美共闘Revolution委員会」を新たに立ち上げ、70年代を通して美術表現の制度を批判しながら絵画の解体と再構築を試みました。今回はこの時期に制作された8点を収集したことで、もの派を相対化し得る作品が加わったことになり、70年代美術をより多角的に検証していく足がかりとなりました。



林芳史《X》1976年

林芳史は、1960年代末から李禹煥や関根伸夫らと交流し、もの派の理論形成に影響を与えた作家です。今回受贈した版画・ドローイング85



飯田昭二《紙・墨》1989年頃

点は、作家個人だけではなく、同時代の研究をも深めていくことのできるもので、意義深い収蔵です。併せて収蔵となった《紙・墨》の作者、飯田昭二は、もの派と深いかわりがあったグループ「幻触」のメンバーであり、本作は林が旧蔵していた作品です。

このほか、野見山暁治(1920-)の《今日になった》、野田哲也(1940-)の《Diary; April 3rd '76(c)》、秋岡美帆(1952-2018)の《ゆれるかげ》、正木隆(1971-2004)の《造形99-2》や《shot02-2》などは、これまでに収蔵してきた同作家の作品と同じシリーズ、あるいは関連性の高い作品であり、今後、作家の画業をより掘り下げてご紹介できることになりました。また、埼玉ゆかりの作家田中保(1886-1941)、早瀬龍江(1905-1991)の油彩画、白木正一(1912-1995)の版画・ドローイング、森田恒友(1881-1933)旧蔵のトランクも加わりました。



早瀬龍江《妖火》1954年

今後、修復や額装などが必要な作品についてはそれぞれ適切な処置を施しながら、調査研究や展示に活用してまいります。まずは、MOMASコレクション第2期「さいきんのたまもの」(9月3日～11月27日)でこれらの一部を出品いたします。新たなコレクションを、どうぞ見にいらしてください。(K.M.)